

# 大学のある町 とうべつ

当別町に北海道医療大学ができたのは、昭和49年。来年は創立30年を迎えます。その間、数多くの学生、教員、大学関係者が当別に関わってきました。人口2万人の当別町と大学とのかかわりを考えてみましょう。

## 1 歯の健康

### 訪問歯科事業

北海道医療大学歯学部附属病院は、平成7年5月から平成15年3月まで当別町の委託を受け「寝たきり老人と訪問歯科事業」として、高齢などで通院できなくなった方々を対象に「在宅訪問診療」を行ってきました。これは、医療大の教育目標にある『地域社会ならびに国際社会への貢献』の第1歩で、平成12年11月には、「地域支援医療科」が設置され、より充実した取り組みを行っています。

訪問診療では、簡易な治療のほか、入れ歯や口の中を良好な状態に保つための診療にも重点をおいており、徐々に住民の意識も変わりつつあります。

### 歯科健診

みなさんは①「8020（ハチマルニイマル）運動」、②「健康日本21」

という言葉を目にしたことがあるでしょうか。

①は80歳になっても自分の歯を20本以上保ちましょう、②は「すべての国民が健康で明るく元気に生活できる社会」を実現するための健康づくり運動で、項目のひとつに歯の健康も含まれており、どちらも厚生労働省が推進しています。

当別町は医療大と連携し、8月に西当別コミセンで開催した巡回ドックに、初めて歯科健診を行いました。



191人のドック受診者のうち147人（77%）が歯科健診を受け、その結果を基に歯科保健相談を行ったほか、医療大が作成した

「当別町2万人歯の健康手帳」の配付を行いました。

医療大の廣瀬助教授は、「住民が歯の健康をもっと考え、毎日健康に過ごすために、千葉教授を中心に町と連携して全町民を対象にした『当別町2万人歯の健康プロジェクト』を策定し、このプロジェクトのひとつとして「歯の健康手帳」を作成しました。町民が定期的な歯科健診を受けることで常に自分の口の状態を把握でき、歯科医に持っていけば歯の状態がわかり、治療に役立てることもできます。当別町を口腔健康管理モデル地域として、道内外にアピールしていくことで、大学として歯科保健の分野で町に貢献していきたい」と説明します。



小児歯科の受付  
楽しい雰囲気の工夫がいっぱい！



歯科衛生士専門学校の学生が子どもの歯の健康指導に使うエプロンは見ただけでも楽しい！

## 恵まれた環境

当別町は、「大学歯学部附属病院」と8カ所の歯科診療所があり、人口1万人当たりの歯科医師数は約85名にもなり、北海道平均の約10倍に当たります。町民にとっては、口の健康維持、管理に関して非常に恵まれた環境にあるといえます。



平井病院長

医療大歯学部附属病院の平井病院長は、「町民の皆さんにこの有利性を是非活かして欲しい。歯は、健康を支えています。早期発見、早期治療することで、患者さんの身体的負担や医療費の軽減にもつながる」と語ります。大切なことは毎日の歯磨きで虫歯や歯槽膿漏を予防することです。自分の口の中を知り、正しい歯磨きで、歯の健康を守りましょう。

## 2 生涯学習事業

### ゆとりっちセミナー

医療大の教員が、公民館や大学の施設などで、テーマに沿った話題を住民にわかりやすくお話しする、『ゆとりっちセミナー』は、平成2年度から、町教育委員会と医療大が連携して行っている事業です。

毎年、5、6回開催しているもの

で、今年も、「春の野鳥観察」、「歯並びと健康」、「生と死」などをテーマに講演が行われています。興味のあるテーマを選んで参加する方、毎回のように参加する常連の方など、20人前後の参加者は、講師の話に熱心に耳を傾けています。

ユニークなのは、小学生を対象にした大学の実習室での科学実験。学校では体験できない不思議な実験に子ども達の真剣なまなざしが注がれます。

### 地域連携セミナー

今年度からは、多くの町民が共に考える機会として、障害者でつくる音楽グループを招いて「市民交流音楽会」などを開催しています。音楽を通じて、精神障害を持つ方々の生き方や人生を理解し、共生社会をめざす手がかりを探りました。

### 公開講義

医療大の学生を対象とした講義「総合科目」を一般にも公開しています。今回は、9月から11月まで「新しい健康科学に向けての課題と展望」をテーマに11回の講義を聴くことができます。

学生と席を並べて、専門分野の話や聴くことができるのも、大学がある町の特徴といえます。

昨年のゆとりっちセミナー科学実験教室  
子ども達の表情はみんな真剣



「ゆとろ」での市民交流音楽会  
障害を持つ方の歌と話に耳を傾ける

当別町は町としては珍しく、大学、大学附属病院のある町として、素晴らしい特徴を備えています。町と大学と町民が連携しあっていることは、これからのまちづくりの幅を広げていく可能性を秘めているのではないのでしょうか。